論文の内容の要旨

論文題目　日本語時代の台湾短歌―結社を中心にした資料研究―

氏名　頼衍宏

台湾は大日本帝国の一部分であった時代（1895～1945 年）、日本語が国語であった。先の大戦が終るまでの 50 年間、日本文学の養分が絶えず当地に注入した。日本伝統短詩型文学の短歌（五七五七七）もその例外ではない。21 世紀の今でも、「台湾歌壇」という結社の創作活動が営まれており、短歌の人気が未だ絶えていない。

然るに、この 3 世紀に跨がるジャンルについては、＜台湾文学史＞ではまともに取り扱われてこなかった。両国における研究史を見ても、偶々目に付いた資料を踏まえて台湾歌壇を論じる通弊が見られ、或は誤解された部分的な台湾歌壇像しか語られてこなかった。

確かな台湾歌壇全体像の提示が今、求められている。そこで本論文では日本統治時代における台湾歌壇の発生と史的展開を解明した。

第一章では、＜台湾文学史＞の中に短歌への視点が欠落している現状を指摘し、この問題を解決するための方法が書誌的研究にあることを述べた。次いで、歌人が結社に依存する歌壇の有様を確認し、孤蓬万里の年表「台湾短歌の揺籃」を踏まえて調査研究を進める時の留意点と取り組み方を示した。

第二章では、「台湾短歌の揺籃」で提示された 21 結社及びその機関誌を一々調査研究した。

＊「新泉」＊「にひ星」「人形」＊「十月」「あらたま」＊「泊芙藍」「あぢさゐ」「行人」「八雲」＊「蜻蛉玉」「海響」「相思樹」「朱轎」「原生林」「大タロコ」「棕梠竹」「紅樹」「台湾」＊「がじゆまる」「南台短歌」「やまなみ」

その中で一次資料の現存が確認できないものは、6 点（星印）である。根本資料が散逸した場合は、同時代の内地・台湾における短歌雑誌、結社発行所地元の新聞紙等の傍証資料を務めて発掘して、結社の基本性格を明らかにした。その上で各結社すべての展開相を追跡した。そのうち 1940 年以降鼎立し、尚且つ 1945 年まで発刊した 3 大結社の概略だけを記せば、以下のようになる。

❶「あらたま」バックナンバーは 19 年弱の分だけ現存が確認しうる。

まず「あらたま」を創刊する前に浜口正雄が「人形」に出詠し、「台日歌壇」の連中と共に「あらたま第一次発展の基底」を作り上げた実態を究明した。平井二郎による「第二次発展の基底」の実態も明らかにした。次に、「あらたま」主宰となった平井が内地母誌「水甕」の旧作を『攻玉集』に編入したことを指摘し、「あらたま」が「水甕」系とされる由縁を明らかにした。平井が『攻玉集』の中に明示した「寂」の理念には、内地母誌「ポトナム」色が響いていた。東京の歌誌に浸潤していくうちに平井が「寂の耽美」を提唱し、これが「あらたま」の批評基準の一つとなっていく。「ポトナム」台北支部長にまでなった平井だが、『歌集台湾』をめぐる事件

と、「ポトナム」の内部歌論問題を契機に「ポトナム」から遠のいていく。その反面、竹尾忠吉の台湾来任に刺戟されて、島木赤彦はじめ中央歌壇随一歌誌「アララギ」へ接近し、「あらたま」が「アララギ」の「出店」と認識されたことを見届けた。1935 年に平井は、北原白秋の「台湾は歌にならない」説に対応するべく、「真個の台湾短歌」を追求する意気込みを示した。即ち「アララギ」の『万葉集』尊重に従い、平井は台湾短歌には万葉の東歌、防人歌からの影響が否定できないことを説き始める。この「東歌」影響説は台湾方言の詠み入れに反映することを論じ、「防人の歌」影響説の極致は台湾人軍医による防人歌にあったと指摘した。次に、「あらたま」の出詠統計表を提示した上で、「真個の台湾短歌」という主張が出された 1935 年が第 1 回隆盛期となっており、第 2 回隆盛期を迎えた 1943 年に「台湾文芸功労賞」を授けられたことを明らかにした。受賞の背後に、台湾人歌作者を含めて「あらたま」系歌人の中央歌壇進出、島内における新聞・雑誌短歌欄の選者進出という諸実績があった。「台湾芸術」において陳奇雲が選者となったことが、「本島人歌壇」の成立と、日本人が本島人を指導する図式を逆転した一つの画期をもたらしたことを究明した。次いで、戦局の悪化によって「あらたま」が廃刊せざるを得なくなった事情を確かめた。

❷田淵武吉「原生林」は 10 年分全部揃っている。

まず内地歌誌「国民文学」台北支部の活動を推し進める中で同誌の大黒柱松村英一が台湾短期滞在の間に島内歌壇に与えた刺戟を跡付けた。結果、松村の台湾詠が「原生林」の命名に繋がったことを確認し得た。また、松村の指導と「朱轎」の事件という明暗の狭間に「原生林」創刊があったことを明らかにした。次に、「原生林」で力説された「現実主義」が、田淵が選歌を仰いでいる師匠松村の歌論の一節であり、これを発展させたのが田淵の「まこと」（真事、真言）論であると指摘した。田淵は後進誘掖の実績で総督府に認められ「台湾文芸功労賞」を授けられた。この点に鑑みて日本人と台湾人に分けて考察を加えた。前者では、「原生林」における池田敏雄短歌の中に読み込まれた台湾民俗の題材と台湾語の使用が、雑誌「民俗台湾」に継承された経緯を指摘した。後者では、本島人出詠が「真の皇民化」を意味するという論の延長線上に、大東亜戦争に入ると田淵は本島人歌作者の育成に乗り出した。「原生林」の「本島人志願兵」短歌が『大東亜戦争歌集』に入ったのがその頂点であるが、当該本島人は志願兵ではなかったことも見届けた。「まことの道」が「皇国の道」であるとする田淵は、社外で「皇国の道」を受け持ち、そこの短歌欄では＜学生皇民短歌＞の全島学際的誘掖がなされたことを指摘した。

❸斎藤勇「台湾」も 6 年分全部揃っている。

まず斎藤の編輯した内地歌誌「日本短歌」と「台湾」との諸類似性を指摘した。次に井東襄の＜台湾歌壇大同団結事実無根＞論について批判を加えた。関連資料を分析した結果、台湾歌人クラブより「台湾」へと、台湾文芸家協会への 2 通りの大同団結の実態を明らかにした。次

に、「台湾」が 3 結社（「あぢさゐ」「行人」「棕梠竹」）のために支部化・統合への道を提供したことや、全島歌壇再編のために演じた役割を確かめた。次いで、斎藤の職歴を踏まえて、台北州 3 校で繰り広げられた短歌指導の実績（例：李登輝の短歌）を究明し、この過程の中から「台湾」会員が発掘されたことを見届けた。また、「台湾」に所属する台北三高女教員も、必修科目となった短歌教育の中で台湾人学生を「台湾」に送り込んだが、陳氏詠美の登場がその頂点であると確認した。次に、斎藤の短歌について、彼の「歌語」「連作」には内地母誌「霸王樹」の流れを汲んでいたことを提示した上で、井東の説を退けた。斎藤の連作について新聞記事と照合し、そのテーマが大東亜文学者会議で強調されていた「戦果」にあったことを指摘した。次に、「台湾」で手製版の「愛国百人一首かるた」による競技が行なわれた実態を究明した。そして、大東亜文学者会議・愛国百人一首かるたへの接近は、斎藤が日本文学報国会台湾支部の理事であったことに起因することを指摘した。次に、「台湾」が休刊せざるを得なかった理由は、激戦中の主宰応召にあったと確認した。

第三章では、第二章で明らかになった短歌雑誌の基本書誌、各結社の交流関係と共に、各々牽引された短歌運動を綜合して纏め直した。そこから得られた概要は以下の 6 点である。

①根岸系による台湾歌壇の制覇を確かめた。

②台湾歌壇の対立・派生・離合分散の展開相を図式化した。

③本島人選者と日本人・台湾人投稿者からなる「本島人歌壇」が 1940 年に成立した。

④「八雲」系の「皇民化」主張を経た後、「皇民化運動」から新たに＜皇民短歌＞が生じた。

⑤「真個の台湾短歌」は「あらたま」系に説かれた後、「台湾」の「南方短歌」へと拡大した。

⑥台湾歌壇の発展を阻む検閲は、政治社会批判詠・軍事機密詠・差別用語であった。

これ以外に、短歌資料を視野に入れると、これまでの＜台湾文学史＞をめぐる先行研究とは一致しない事実が浮かび上がってきた。主な成果は次の 7 点である。

(1)台湾歌壇の全体像解明を以て、部分的台湾歌壇像を見直し得た。

(2)五七五七七は日本短詩型との事実を以て「台湾文学は中国文学の一部」説を見直し得た。

(3)台湾人による詠作は 1902 年から始まり、中央歌壇進出は 1919 年だとの事実を確かめ得た。

(4)「皇民化」用例が 1936 年から始まるとの説を、台湾歌壇人の用いた 1935 年に訂正し得た。

(5) ＜皇民短歌＞という事実を以て「皇民文学」の「極く少数」作家創作説を見直し得た。

(6)短歌雑誌併合(1943 年)との事実を以て 1944 年の 2 大文芸誌に限る統合説を見直し得た。

(7)「糞リアリズム論争」の 1943 年発端の通説を短歌論評の事実を以て 1940 年に見直し得た。

特に (3)～(7)を見ても分かるように、短歌は＜台湾文学史＞の主流として語られている小説ジャンルに見劣りをしないどころか、むしろ時代を先取りするという有様を確認出来る。

本論文は台湾歌壇の基礎研究を築き得たのみならず、＜台湾文学史＞の現状に対しても、新たな問題を提起しうるであろう。